

# 女子大学生の野球参加動機について

## Female Students' Participative Motivations to a Soft-baseball

キーワード：女子大学生、野球、参加動機、質的研究

阿江 美恵子

### 1. 緒言

1976年モントリオールオリンピック夏季大会では男子の種目数20に対して女子の種目数は10であったものが、2004年アテネ大会以降男子25に対して女子24と女性のスポーツ種目が拡大している(日本スポーツとジェンダー学会編、2010)。しかし、女性の野球への参加はまだ少ない。軟式野球については、大学女子野球連盟の全国大会が2010年に24周年を迎えた。硬式野球では、2006年中京女子大学が男子硬式野球連盟に参加したが、けが人が続出し組まれた4ゲームを辞退することになった。その状況を心配して、女子リーグを作るべきだという論説も見られた(図1)。2010年の春には、関西で女子プロ野球チームが2チーム結成された。関東女子硬式野球ヴィーナスリーグには17チームが参加し、プロの読売ジャイアンツが後援している。野球チームへの女性の加入はまだ数が少ないものの、少しずつ増加していると考えられる。

小学生の参加する少年野球チームでは少子化の影響もあり女子児童の参加を認めるようになった。しかし、中学校では身体・運動能力の差が大きくなる時期であるためか、また男子の野球への関心が社会的にも強いためか、女子のチームはない。高校に入ってもこの状況は続き、男子に交じって野球部に入るか、全国に少数ある硬式または軟式的女子チームに入る以外は野球をする場がない。中学校・高校では野球にかわる種目としてソフトボールが女子向けの部活動として盛んである。

T女子体育大学では、軟式野球部の部員が2006



図1 女子リーグ創設を主張する記事(2006年4月27日 毎日新聞朝刊)

年には70名を越え、2010年には50名ほどに減ったものの多くの参加者を抱えている。日に焼けて真っ黒な女子学生の様子は男性と見間違ふほどである。野球部加入者には初心者も多く、野球という男性イメージの強い種目で男性のようなふるまいをする女子学生は、一体どのような理由で野球を選択したのであろうか。その疑問からこの研究の発想を得た。

本研究は以下の3つを目的とした。第一に野球部に参加している女子学生の参加動機を明らかにする。第二に野球選択を決定する要因を明らかにする。

第三に野球の男性イメージから生じるジェンダー観の揺らぎを検討する。

また、ジェンダー研究への資料としたいと考えた。

## 2. 研究の背景

「なぜスポーツに参加するのか」、「なぜスポーツをやめるのか」、「なぜ特殊なスポーツにその人たちが参加するのか」、「なぜ人々はつまづいてもスポーツを続けるのか」などは、スポーツの動機づけ研究で論じられており、これらの疑問に答えるために、理論やモデルが示されている。Lavalleyら(2004)によれば、これまでにDeci & Ryan(1985)の自己決定理論、Harter(1978)の有能感理論、Nicolls(1984)の達成目標理論、自己効力感と社会的認知理論(Bandura, 1977)、社会交換理論(Thibaut & Kelley, 1959)などが提唱されている。

理論を概観すると、心理的変数として能力認知、自己効力感、目標設定、競技志向性、感情状態、楽しさ、などがあげられ、環境(状況)要因としては、重要な他者、体力、活動選択、スポーツの持つ構造的な障壁などが挙げられている。

スポーツに参加することは、青年期前期に性差が見られる。阿江(2004)は首都圏の公立中学校の1年生から3年生364名(男子212名、女子152名)を対象に2002年に運動部への参加の様子を男女別に調べた。その結果、男子は学年に関係なく8割が運動部に加入していたが、女子では1年生で7割加入

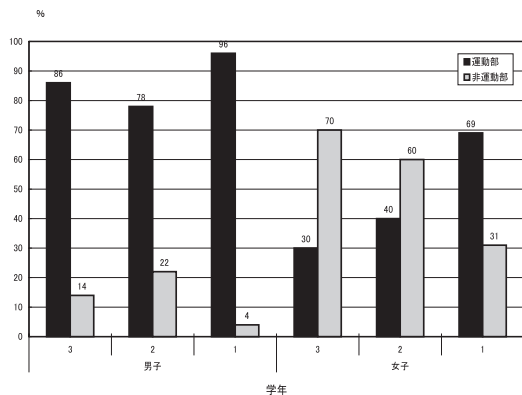


図2 中学生の男女別運動部参加率(阿江, 2004より引用)

していたものが、学年が上がるとともに減少し、3年生では3割に落ち込んでいた(図2)。平均すると男子は87%が運動部に加入し、女子は45%しか加入していない。

女子のスポーツへの参加が少ないことについては、女子運動部の種類が男子に比べて少ない、施設が限られているので男子優先、という理由が考察されているが(阿江, 2004)、Scullyほか(1997)は、アメリカでも女子のスポーツへの参加が男子よりも少ないことを示し、その理由として、練習、指導、試合に時間が費やされることが女子に好まれない、男子は過度の競争特性を示し女子は自己発達のためにスポーツに参加するという動機づけの違いによる、と指摘している。

前述したように野球は小学生の少年野球で女子の参加が認められているが、中学校、高校では女子の野球部はほとんどなく、ソフトボールや男子と一緒に部活動に加入するしか継続方法がない。したがって大学で野球を開始するためにどのような過去のスポーツ経験が必要かが、参加動機の理解にかかわると思われる。

また、親の養育態度が子どもの社会的行動に関与するという研究は多くみられ、とくに幼児期は親の行動をモデリングしたり、親からのフィードバックを通して社会的行動が身につくことが示されている(中道・中澤, 2003、中台・金山・前田, 2004)。したがって親のスポーツ行動が子どもに影響することが予想される。

他方、「女の子は女の子らしく」「男の子は男の子らしく」という伝統的な性役割観では、女子が野球をすることは推奨されない。性役割態度の発達がどのような要因と関連するかを調べた相良の研究(2000)では、親が女子に対してスポーツ選手や医者など性にこだわらない職業を期待することが女子が性役割に対して柔軟な態度をもつ重要な要因であることを見出した。したがって、親が野球を「男の子らしい」と決めつけないことが女子の野球参加を妨げないことが予測できる。

Welk(1999)のモデルによると、重要な他者の強化によって、過去のスポーツ体験が生まれることが示されている。その後野球を直接実施する女子は少な

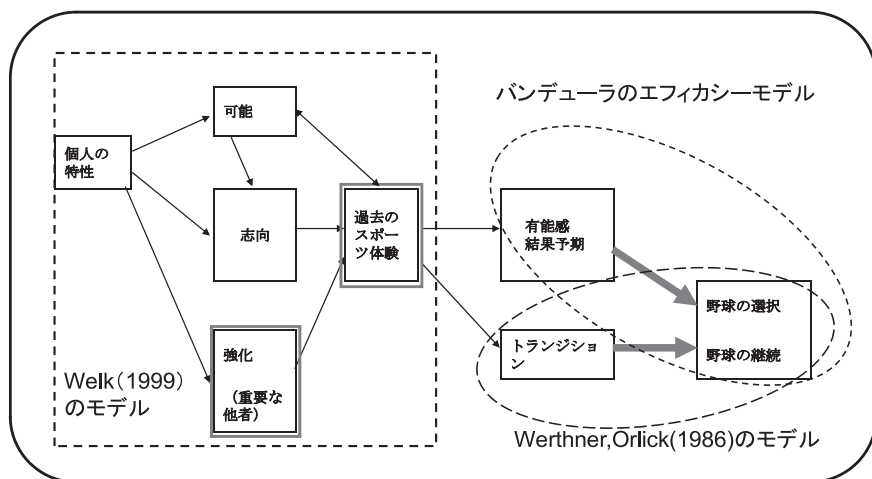


図3 参加動機に関する理論モデル(阿江作成)

いため、過去の野球体験がどのように野球選択につながるかを考えるために、Welkのモデルから過去のスポーツ体験を重要と考え、その体験が有能感を高めたり、良い結果を生むと信じる結果予期を生じると仮定した。そこでバンデューラのセルフエフィカシーモデルとWerthner & Orlick (1986)のモデルをつなぎ合わせて、種目を継続するものは有能感と結果予期、他の種目を選択するものはトランジションが野球選択を生むというモデルを作成した(図3)。

### 3. 方法

対象 T体育女子大学野球部部員47名(2~4年生)

調査時期 2006年6月~7月

調査方法 半構造化面接調査。一人ずつ1時間くらい面接を行った。

研究手法 質的研究を用いた。質的研究では、口頭データや視覚データが扱われる。口頭データでは半構造化インタビュー、ナラティブ・インタビュー(物語/語り)、グループ・インタビューなどが用いられる。ここで用いた半構造化面接は、標準化されたインタビューや質問紙を用いた時よりも回答の自由度が高いという特徴がある(フリック, 2002)。男性イメージが強い種目に参加する様々な背景を明らかにしたい意図があったため、この手法を用いた。

面接項目 競技歴、野球開始動機、出身県、野球をして満足したこと、野球開始についての周囲の反応、女性的・男性的な行動についての関心の5項目を設定した。

### 4. 結果

面接の結果、項目ごとに明らかになった内容をカテゴリーデータとしてコード化して集計した。

#### ①参加動機と競技経験

競技歴は、内容によって野球系なし、中高ソフトボール、小学校のみ野球・中高ソフトボール、中学校のみソフトボール、高校野球・ほかはソフトボール、小・高野球にわけてコード化した(図4)。その結果、過去の野球型の種目の経験者(ソフトボール・軟式

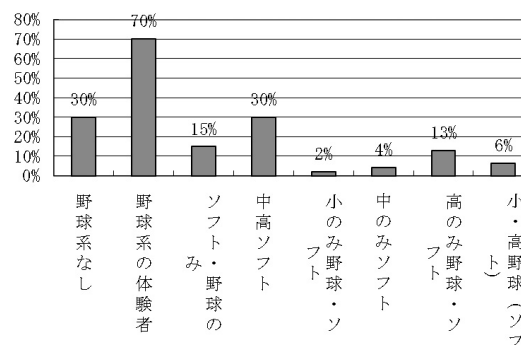


図4 競技歴のパターン

野球・硬式野球)は、70%であった。

大学での野球的開始動機は図5のように、野球という種目自体への関心が一番多く、次にソフトボールからの転向であった。所属する大学のソフトボール部は全国から選手が集まり高い競技力を持っている。そのためソフトボールに限界を感じたものが野球に転

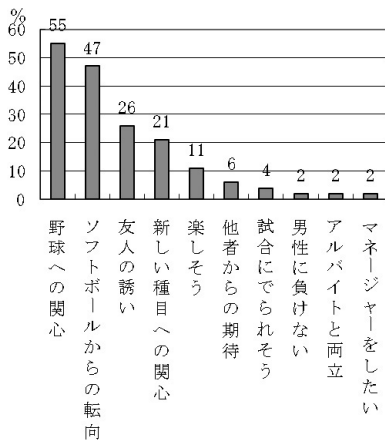


図5 大学での野球開始動機(複数回答)

向した可能性がある。

動機の強さ(大学での野球参加動機を、弱い、普通、強い、の3カテゴリーで分類)を目的変数として、重要な他者、野球型の種目(ソフトボール含む)の体験の有無、小学校期の野球体験の有無(小学校で野球をした2パターンを合計して分析には用いた)の3変数がどれくらい寄与するかを調べるため、数量化1類を用いて分析した。表1は3変数のクロス集計をまとめたもので、表2-1、2-2、2-3、は各変数の相関係数と貢献度のレンジを示したものである。変数間の関連はなかった。

表3は、回帰の分析精度を示したものである。四捨五入して0.5で、辛うじて3変数による動機づけの強さの予測精度を満たすものであった。表4は分析精度を分散分析したもので、予測可能であることが示された。

これにより重要な他者(父親、兄)、野球型種目の体験、小学校時代の野球体験の順で動機づけの強さに寄与していることが示された。図6は重要な他者

表1 重要な他者、小学校時代の野球経験、野球型種目の体験のクロス集計

項目名	カテゴリー名	重要な他者							小学校の野球体験		野球型種目の体験	
		父	兄	母	他の男性	他の女性	家族	弟	非野球	野球	なし	あり
重要な他者	父	22							16	6	2	20
	兄		5						2	3	1	4
	母			2					1	1	0	2
	他の男性				4				4	0	3	1
	他の女性					2			2	0	2	0
小学校時代の野球経験	非野球	16	2	1	4	2	0	1	26		9	17
	野球	6	3	1	0	0	1	0		11	1	10
野球型種目の体験	なし	2	1	0	3	2	1	1	9	1		10
	あり	20	4	2	1	0	0	0	17	10		27

数字は実数

表2-1 レンジ・外的基準との説明要因の相関係数

項目名	レンジ	単相関	偏相関
重要な他者	1.4840 1位	0.3822 2位	0.4083 2位
小学校時代の野球経験	0.0945 3位	0.2980 3位	0.0654 3位
野球型種目の体験	1.0313 2位	0.5797 1位	0.5879 1位

表2-2 説明要因相互単相関係数

項目名	重要な他者	小学校時代の野球経験	野球型種目の体験
重要な他者	1	0.296	0.044
小学校時代の野球経験	[ ]	1.000	0.263
野球型種目の体験	[ ]	[ ]	1

[ ]は無相関検定

表2-3 説明要因相互偏相関係数

項目名	重要な他者	小学校時代の野球経験	野球型種目の体験
重要な他者	1	0.295	-0.036
小学校時代の野球経験	[ ]	1.000	0.262
野球型種目の体験	[ ]	[ ]	1

[ ]は無相関検定

をまとめたものである。複数回答であるが父が47%、兄が17%と身近な家族の男性の影響が強いことが示された。

少数だが、小さなときから野球に強い関心を持ち、思春期に女性としてのアイデンティティを否定して成人したと思われる事例も存在した(父親との関係に關

選択権がないと嘆くものが10.6%いた。

○スカートをはくことに非常に抵抗感があるものは36.2%と1/3おり、他方スカートが大好きという者は14.9%とかなり少なかった。

○男っぽくありたいと思う者は4.2%と少数で、男性のようにはなりたくない者は27.7%、男性のような服装は個性だから良いと認めるものが21.2%いた。

表3 回帰の分析精度

決定係数	0.47
自由度修正済み決定係数	0.42
重相関係数	0.68
自由度修正済み重相関係数	0.65

表4 分析精度の分散分析表

	平方和	自由度	不偏分散	分散比	P値
全体	25.57	36			***
回帰	11.91	3	3.97	9.59	0.000106
残差	13.66	33	0.41		

\*\*\*: P<0.001

## 5. 考察

大学で野球を選択する動機を検討するために、結果で示した要因のほかに、地域性(出身県)も検討したが、結果としては父親・兄という男性の影響と大学以前の野球型スポーツの経験の影響が大きかった。このことは、図3をほぼ支持するものであった。しかし、小学校で野球を経験した対象者は少数で、大学で野球を開始した対象者にその影響はほとんどなかったと言える。また、ソフトボールからのトランジションが多く、野球型種目の経験は野球の選択に強い影響があることが示された。他の要因の影響については、図3のモデルからはいくつか仮説を立てることができるが、それについては今後の課題とした。

今回の結果で、野球への参加に男性の影響が大きかったことは、スポーツが男性のものであることを示したとも言えるようだ。女子全般のスポーツ参加が低迷する現状は、身近なスポーツ好きの男性からの働きかけが減っていることを示しているのかもしれない。

野球は「男性のスポーツ」のイメージが強いが、野球型の種目の経験が野球への否定的感情を低減させることが明らかとなった。

中学・高校で、男子の野球部に加入したいと思ってもそれがかなわなかった者や、男子の高校野球甲子園大会に出たいという希望も見られた。今回の対象者のうち小学校で野球に加入した者は比較的多く、中高で女子に野球の道が閉ざされることへの憤りを感じている者も多かった。これは野球競技の関係者にはぜひ考えてほしい点である。

今回の調査で、少数だが男性的であることへのあこがれが野球選択の動機に見られたものがあったが、大半は「男性のようにはなりたくない」と考えていた。

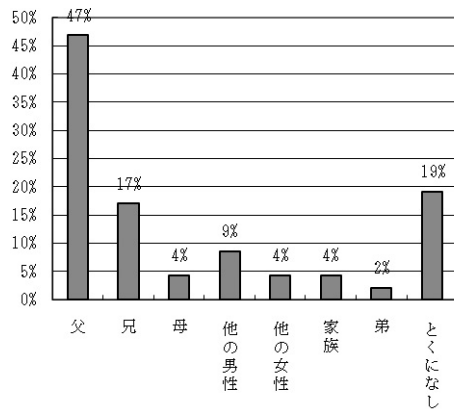


図6 野球参加に関わる重要な他者(複数回答)

連すると思われる)。

### ②野球の男性イメージと女性性の揺らぎ

野球の男性イメージについて聞くと、以下のような内容が語られた。

○野球を純粋にスポーツとして考えているものは半数の46.8%いた。

○中・高校では野球は男子のスポーツで女子には



したがって、野球やサッカーといった「男性的スポーツ」への参加者で男性のような格好をしている者たちは、ファッションとしてその格好を選択していると言えよう。

本研究者は当初男性イメージで野球を見てしまった感はあるが、結果を見ると男性的イメージにとらわれすぎず、種目としての楽しさが多くみられたので、そのことが重要であると思われる。

## 6. まとめ

大学の女子野球部部員への野球参加動機の質的調査の結果、重要な他者と野球型スポーツ種目経験の関与が認められた。一部男性的な行動への憧れは見られたものの、ほとんどの参加者は野球という種目を楽しみ、ファッションとして男性と同じような服装をしていることが示された。

男性への傾倒は明確ではないが、少しその傾向の認められる者もいた。

## 引用文献

- 阿江美恵子 (2004) 海外で活躍する日本人エリートスポーツ選手の効果 — 中学生の役割モデルになりうるか —, スポーツとジェンダー研究2: 43-48.
- Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a Unifying Theory and Behavioral Change, *Psychological Review*, 84: 191-212.
- Deci, E. L. & R. M. Ryan (1985) *Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior*, New York: Plenum Press.
- Harter, S. (1978) Effectance Motivation Reconsidered: Towards a Developmental Model, *Human Development*, 21: 34-64.
- リック, U. (2002) 第8章半構造化インタビュー (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子訳) 質的研究入門, 東京: 春秋社, pp. 94-121.
- 村社拓信 (2006) 記者の目 大学リーグ4試合辞退の中京女子大学, 毎日新聞4月27日朝刊.
- Lavallee, D., J. Kremer, A. P. Moran, & M. Williams (2004) Chap. 4 Motivation, in “*Sport Psychology*”, New York: Palgrave Macmillan, pp. 53-90.
- 中台佐喜子, 金山元春, 前田健一 (2004) 母親の養育態度が幼児の問題行動に及ぼす影響—養育態度→家庭における問題行動→園における問題行動というプロセスの検討—, 広島大学心理学研究, 4: 151-157.
- 中道主人, 中澤潤 (2003) 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連, 千葉大学教育学部研究紀要, 51: 173-179.
- Nicholls, J. G. (1984) Achievement Motivation: Conceptions of Ability, Subjective Experience, Mastery Choice and Performance, *Psychological Review*, 91: 328-46.
- 日本スポーツとジェンダー学会編 (2010) スポーツ・ジェンダーデータブック2010.
- 相良順子 (2000) 児童期の性役割態度の発達, 教育心理学研究, 48: 174-181.
- Scully, D. & J. Clarke (1997) Gender issues in sport participation. In J. Kremer et al. (eds.) *Young people's involvement in sport. Adolescence and Society (Series)*, pp. 25-56, London: Routledge.
- Thibaut, J. W. & H. H. Kelly (1959) *The Social Psychology of Groups*, New York: Wiley.
- Welk, G. T. (1999) The youth physical activity promotion model: A conceptual bridge between theory and practice, *Quest*, 51: 5-23.
- Werthner, P. & Orlick, T. (1986) Retirement experiences of successful Olympic athletes, *International Journal of Sport Psychology*, 17: 337-363.

## 付記

本研究は日本体育学会第57回大会(2006)で「女子野球部員の野球継続動機について — ジェンダー観のゆらぎへの質的アプローチ」と題して、口頭発表したものに加筆修正したものである。

個人の情報に関するデータは明らかにしなかつ

た。本学の研究倫理規定制定以前のデータ収集であることを明記する。

査読者には本研究者の大きな誤りを指摘いただき大変感謝している。尚、データの分析は「EXCEL 数量化理論 Ver. 2.0」プログラム(株式会社エスミ)を用いた。